シリーズ

# 嶋屋日記の風景⑥

問い合わせ先 中央図書館 ☎0968(25)1111

## 嶋屋日記の芝居

嶋屋日記の中には、「浄瑠璃」「操芝居」「相撲芝居」などさまざまな形で芝居が登場します。京都・大坂などの遠方から竹迫などの近隣まで、日本各地から演者が訪れ芸を披露する様子をご紹介します。

嶋屋日記の三冊目、天明元（1781）年5月5日の項には、京都の浄瑠璃語り藤兵衛が宗伝次（「嶋屋日記」筆者の一人）の元へ訪れたことが書かれています。実際の心中事件を基に作られた浄瑠璃「梅川忠兵衛」をはじめ、複数の演目を奏し、聞く人は「貴賤群集」身分に関わらず、とても繁盛したそうです。興味深いことにこの浄瑠璃語りの藤兵衛、本業は京都の縫物屋であったとか。「縫もの極々の上手也」と書き残されています。

同じく天明元年の7月には西覚寺で「アヤツリ」（人形浄瑠璃）が行われました。松囃子の翌日という日程の影響もあったのか「見物二千五百余有之（あまりこれあり）」とあり、かなりの人出だったようです。このように寺社で行われる芝居は勧請興行の一環と考えられ、その多くが寺社の敷地内で演じられていました。西覚寺の他にも東福寺、玉祥寺、正観寺や山鹿の円頓寺などでも定期的に開催されていたことが日記の記述からうかがえます。

他にも、天明五（1785）年には大坂から来た浄瑠璃語り貞就という人物が登場します。「引語・三味せん無類之上手」で、その腕前は「聞人耳をおとろかす」ほどだったため、演奏の後に宗文五郎方へ滞在してもらい、浄瑠璃と三味線を教わったそうです。

このように、芝居が日常の中に組み込まれていた様子が嶋屋日記の中ではたくさん描かれています。ここに挙げたもの以外にも芝居にまつわるエピソードが載っています。菊池デジタルアーカイブ（https://da.library-kikuchi.jp/）でご覧ください。

「嶋屋日記」の芝居の記述

←菊池デジタルアーカイブQRコード

---

# 人権・同和教育シリーズ159

問い合わせ先 人権啓発課 ☎0968(25)7209

## 受け継がれる命

菊池市地域人権教育指導員　宮川伊十

「ひいじいちゃん、初めまして、あさみだよ」

今から10年前、中学校の修学旅行で沖縄県糸満市の平和祈念公園にある「平和の礎」を訪れた際の出来事である。海を見渡す丘の上に、敵味方関係なく、戦争で犠牲となられた24万1525人の名前が刻まれた石碑が、波のように弧を描いて建ち並んでいる。旅行の前夜、彼女は家族から曾祖父のことを聞き、大切な目的を持ってこの旅行に参加していた。初めて訪れる沖縄の地。限られた時間の中、必死で曾祖父の名前を捜した。生まれ育った県を見つけ、一人ひとりの名前を指で追っていく。そして「あった、これひいじいちゃんの名前だ。やっと会えた」。何度も曾祖父の名前を優しくさすり、自分につながる人の温もりを確認していた。

彼女の曾祖父は、戦争の激化する中、生まれたばかりの子や家族と別れて出征し、沖縄の地で帰らぬ人となった。父親の顔も匂いも知らない幼い息子が成長し、父となり、子どもたちを育て、その思いは孫へと引き継がれた。

この「平和の礎」に刻まれた名前の一人一人に同じような家族がいて、同じような思いがあったことだろう。

この地で今年の6月23日「沖縄全戦没者追悼式」が行われた。この式典での中学生の「平和の詩」の朗読に胸が熱くなった。浦添市立港川中学校3年生の相良倫子さんの堂々とした態度。はっきりした言葉。一度も原稿に目を落とすことなく前を見据えて語る力強さ。戦争を生き抜いた曾祖母の体験談を、子どもの頃から聞いて育った彼女の思いが、言葉となって発信された。まさに犠牲となられた方々の代弁者のようであった。

「私は生きている。私は今生きている」という言葉を何度も繰り返し、敗戦から73年後の今をどう生きているかを問いかける。「私は何と美しい島に生まれ育ったのだろう」と、沖縄の青い海、豊かな自然、そして平和な島であったことを謳いあげる。しかし、「73年前、私の愛する島が、死の島と化したあの日」「みんな生きていたのだ。私と何も変わらない、懸命に生きる命だったのだ」「家族がいて、仲間がいて、恋人がいた」と、平和な日々を突然壊された恐ろしさ、悔しさ、無念さを代弁する。

「心から誓う。私が生きている限り、こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、絶対に許さないことを。もう二度と過去を未来にしないことを」と一人の人間としての自分の決意を述べる。「この青に囲まれた美しい故郷から、真の平和を発信しよう。一人一人が立ち上がって、みんなで未来を歩んでいこう」と呼びかけ、「私は今を、生きていく」と、さわやかな風を残し、降壇した。

沖縄で今起きている数々の不条理の根源がどこにあるか、15歳の目が見事に看破し、これからどう進むべきかにも言及している。

最大の人権侵害である戦争。その引き金を引くのは人である。暴力や戦力では何事も解決しないことを今一度考えないと、受け継がれる命のバトンが途絶えてしまう。